

問題提起1 「21世紀の才能教育をどうするか」

麻 生 誠 先生（放送大学教授・元大阪大学人間科学部長）

ご紹介いただきました麻生でございます。時間が押しておりますので少し早めにお話しいたします。

私、さきほどご紹介のように、40年くらいですか、エリートと教育ということをやっております、なぜやっているかというと僕がエリートじゃないから、コンペンセンション・・・、まあやっております。才能教育は少し違ひまして、あまりやってないんですけど。

今日吉田局長は今退席されましたけど、文部省の審議会等に出ますと、阪大に教育計画論という講座を作ってからいろいろ文部省の仕事もさせられるんですけど、その時、自分の主張というものがポリシーにのるということとはめったにないわけですね。ほとんどないと言っていい。だけど3、4年前、14期中教審の時に、「教育上の例外措置」ということが問題となりました。その時参考人として意見を言わされまして、だいたい私の考えみたいなものが、ポリシーのうえにのったということで、たいへん喜んでいました。喜んでいたというのも変ですけど。役に立つこともあるんだと。学者の、研究者の言っていることもたまにはポリシーにのることもあるんだということを考えておりました。それで、体を張ってやっているというわけではないんですけど、大事に育てていかなきゃいけないというふうに思っています。これは個人的な意見ですけど。

それで、4年ぐらいたちますか、才能教育というものが、あの時、戦後の40年以上のタブーを破って初めて文部省のポリシーとして登場したわけでありまして。それまでそういう教育をやろうとしたら、まず平等主義の側からの反対がありました。非常にしんどいし、日教組から言われるし、なかなか文部省も手を着けない。タブーであったわけですね。それをタブーを破ったと。現在はもう「何でもあり」みたいになってきましたから、あまりそういうことが言われないんですけども。タブーを破ったポリシーというものが初めて登場したわけでございます。その名前は「教育上の例外措置」という形で、そのポリシー名となったわけでございます。14期中教審で出たところは何かと言いますと、当面の課題として、数学とか物理など特定の分野に関して、特に能力の伸長の著しい中等教育段階の生徒に関して、大学レベルの教育研究に触れる機会を与えること。これが第一点でした。つまり、高等学校にしながら大学の授業というものを学べるようなチャンスをつくりなさいということでした。ご承知のようにアメリカでは advanced placement という制度がございます。高校の生徒の13%から20%は何らかの形で大学の単位を履修して、大学に入ってからその単位を正式に認定してもらい、そして少し速いスピードで大学を出たり大学院に行ったりしております。それを日本版の advanced placement をやってみなさい、やりましょうということだと思っただけですね。私今日ここに来したのは、岡田さんがセンター長になったんで、何も京都大学だけの大学教育だと思えないで、advanced placement みたいな新しい才能教育というものの開発をしていただきたいと思います。来たわけでございます。日本版の advanced placement を作る。

それから二番目に、中教審で言ったことは、特に数学に関しては大学入学年齢制限の緩和を試行的に実施するということでした。大学年齢制限の緩和をするということは、結局今日本は18歳の縛りがございまして、帰国子女は6ヶ月早く大学進学できるんですけど、これは非常に強い縛りです。こんな強い縛りをしている国は他にないと思うんですけど。18歳年齢人口というものの風穴を空けなさいと、数学に関してはいろいろな日本でも著名な数学者がおられまして、特に京都大学からはフィールド賞を何人か出していらして、広中先生は審議会にもお出になって、アメリカで「おまえは30ですごい業績を上げたけど、20代でもひとつ業績を上げられた。おまえは二毛作ができたのに、なんで一毛作で終わったのか」ということを言われたそうです。数学の早期入学（early admission）が大事だということを言われたのです。その次とったフィールド賞の人は「そんなものいらない」と言っていますから、なかなかそのへんの調整が難しいんですけど。まあ、early admission というものを数学に関しては認めましょうということになったわけです。

この二点を中教審答申で出したわけです。それを受けまして、調査研究協力者会議というものを文部省がすぐに設

けました。二年あまりにのぼる審議の結果、教育上の例外措置について特定部分の個性を伸ばす教育の推進と題した最終報告を公表いたしました。教育上の例外措置のところで一番言われているのは何かと言いますと、いわゆる社会の指導者養成を目的とするエリート教育とは全く違ったカテゴリーだということです。つまり、教育の個別化とか、個性化の理念というもののうえにたった教育であるということを、まず言ったことですね。エリート教育じゃありませんよということをものすごく強調している。これがいいかとかどうかいうことは問題です。

皆さん方お考えくださるならば、日本の戦前の才能教育は何かというと、これは小学校5年から中学校に進めた。1年スキップできた。それから中学校は5年制ですけども、カリキュラムは4年生で終わったんですけども、4年生から旧制高校に入れた。2年スキップできたわけですね。代表的な人としては、日本の戦後の刑法を作った団藤教授なんていうのは2年早くスキップして出てる人で、あの人の伝記を読んでいて面白かったことは、「自分はこの制度がなかったら東大を卒業できなかっただろう。なぜならば卒業の時に親が死んでしまったから、2年前に親が死んだら私の学費が途絶えて私は東大を出られなかった。こんな有り難い制度はない。」ということを書いておられるんです。これからも大学院重点化になりますと、親もそれほど長く生きてくれないので、これはわかりませんけれども、やっぱりある程度スキッピングしたほうが僕はいいんじゃないかと思うんです。まあそのスキッピングという制度があったということですね。それが日本の才能教育だと。

日本のエリート教育は何かといったら、この京都に来ますといつも僕が思うのは、三高京都大学、京都帝国大学という人材の人脈がございました。僕は阪大に来て20年になりまして、三高 - 京都帝国大学という偉い先生方にはずいぶん可愛がられたりしたんですけど、時々コミュニケーションがわからなくなるようなことがございました。まあそういう人脈がございまして日本の政財界のリーダーというものは、その旧制高等学校と帝国大学で作ってたわけですね。旧制高校というのはものすごくエクスペンシブなエリート教育機関でございまして、先生がたくさん生徒が少ない。それで一般教養というのをやったわけですね。IQだけでなくEQ、これはガボールという人が考えた知能指数ではなくて倫理指数のことですけども、倫理指数の高い奴もつくと。だからIQ150で倫理指数も150、そういう人間をつくるという教育をやったわけです。つまり、使命感を持ったエリートというものを何かの形で必死で作った。これは国が作った。イギリスやなんかですと、これを支配階級が自分の支配ルートを作るために再生産機構として作るんですが、日本のブルジョアジーは金がなかったから、自分たちじゃなく国が作った。この二つを考えると、エリート教育と才能教育が違うということが漠然とわかると思います。つまり、エリート教育というのは、社会的要請に応じて一定数の社会的なリーダーというものを養成する計画的教育であって、これは特別な才能があるとかないかじゃなくて、どちらかというと全人教育なんですね。だからイギリスのパブリックスクールに行きますとほとんど午後はスポーツやってますね。そういう全人教育なんだと。こういう戦前行われたような旧制高校みたいなエリート教育を作るんじゃないんですよということ、それを強調しすぎるほど強調しすぎてこの才能教育の、タブー破りのポリシー化というものが行われたわけでございます。

つまり個別化、個性化の理念。それから例外措置の対象分野と対象者を非常に絞ったということですね。高等学校レベルの生徒で1000人に2、3人程度の才能者を対象とする。それから義務教育では才能教育はしない。数学と物理の才能者だけをとりあげたのは、これらの分野が知識経験の蓄積が必要な他の分野と異なって、論理的思考能力の重要性が高くて、比較的早い年齢段階で才能が伸びる分野であるとともに、これらの分野における才能は基本的に学校教育と関連を保ちながら、伸長、進展、伸ばすのが適切と判断したからというふうに示されております。つまり、将棋の才能を育てるには何も学校教育で育てる必要はない。あるいは非常に小さい時からパターン認識をずっとやって育てればいい。だいたい将棋というのは学歴の高いのは駄目になるというふうになっておりまして、逆相関がある。そういうのは別にこの学校でやる必要はない。また芸術なんかもある必要がないという説が非常にあったわけです。ですけど、物理に数学だけが残った。これもちょっと偶然がございまして、参考人を呼ぶために、物理学者を呼んだ。呼んだ物理学者と呼んだ数学者とが非常に才能教育というものを強調した。early admissionとかadvanced placementみたいなものが大事だということを強調した。そういううちわ話があるんです。体育の人は反対して、芸術の人は芸大の学長の平山さんですけど、あの人はそんなものはいらないと、俺なんかだって普通にやってきてこれだけの者になったんだということをおっしゃいましたそうです。みんな勝手なことを言いますんで、適当にサンプリングして選んだらもう少し違った結果がでたのかもしれないんですが、この二つの分野が残ったということでスタートしたの

が実態でございます。

第三は数学、物理に関して、大学レベルの教育研究に参加する機会に、才能児が参加する機会の形態や方法を明らかにして、大学の教育・研究に触れるようなチャンスを積極的に制度化して作っていけということなんですね。その場合でも、あくまでも学習者個人の選択によるという一点が付け加えられております。どういう形で行われるかと言いますと、大学等の正規の授業への受け入れ、これは受け入れていいわけですね。実際、昭和女子大学では、だいたい advanced placement をやっております。それから本当でしたら筑波なんかでも、筑波の付属でもやれないことはないんですね。付属を持っているところはある意味ではできる。できるけれども、その制度的な問題はまだ局長がおられないからまだわからないんですけど、いろいろな問題があると思います。それから大学等の教員による個別指導。民間団体、組織等によるセミナーや講座。何といても中心は、高校在学中に大学の授業を先行的に履修できるしるみを確定すること。つまり才能教育のひとつとして、アメリカで非常に広く行われている advanced placement の日本版作りをやってみましょうということです。アメリカでも一般教育、これはさっきの岡田先生と少し矛盾するかもしれませんが、一般教養の単位を advanced placement で取ってるわけでございます。そういう新しいアーティキュレーションというものをこれから考えていかなくてもいけないんじゃないかと思います。

それからさっき言ったような、大学入学年齢18歳年齢人口というのはもうそろそろ画一的に守っていくというのは、やめた方がいいんじゃないかと思います。例外措置という名に最もふさわしい、大学入学年齢制限の緩和措置というものを、私はやった方がいいと考えております。こういう本当にマイナーなポリシーなんですね。具体化されるのは、数学と物理の人々に対して advanced placement の日本版を作る準備をなさいよと。それから数学に関してはスキッピングを認めなさいよと。これだけのことをやろうとしたんです。

それで、その後具体的にこれをどういうふうにやったらいいかということで、いろいろな実験、パイロットスタディが行われたんです。これは京都大学もやったのかなあ。名古屋大学がやったと思うんですけど、私学では早稲田もやりました。ひょんなことから、私のところの放送大学もやれということになったんです。放送大学はちょっとこの才能教育と矛盾するようなイメージの大学です。「金さん銀さんも入れようか」と言って怒られたりした大学なんで、才能、英才のような才能のあるやつを入れるというのはあまりなかったんですけど。まあやってみようじゃないかということで、高校生で数学と物理に興味がある人で、そして放送大学の科目を取りたい人を、科目履修生として募集しました。そしてモニター調査をしました。そうすると案外いるんですね。つまり、受験勉強というのはあまり面白くないけど、先行的に自分の好きな物理とか数学の勉強をしたいという人が案外いるんです。東京と大阪でやったんですけど、対象とした教科は微分積分学1、線形代数学、確率論、力学、数体論、物質化学、機械と電磁波、カオスとフラクタル理論、そんなのは僕は知らないんですけど、8科目やったんです。その試験や通信指導やったんですけど、彼ら高校生達は一般学生に比べて非常に合格率が高い。一般は10%でした。自然科学系は。それに対して47%がパスしてるんです。高い。平均点も一般学生に比べて、相対論をのぞいて全部、10点から40点ほど高いということがわかりました。つまり、そういうニーズがあり、そういう人々が大学レベルの授業科目を受けてもやっていけるんだということです。だから、日本の高校生は大学入試のための勉強をもっぱら強いられているということが言われているんですけど、もっと違った、卓越した才能者にとっては、未来の学力へつながっていく大学の講義の先取り学習というのが、自分もしたいし教育上も価値があるというふうに、私は見なしていくのが大事じゃないかというふうに考えたわけです。

こういうようなパイロットスタディがいくつか行われたんですけど、やはり日本では才能教育に関しましては非常に抵抗が強い。日本という国は、あまり異能の才を出てくるのを育てるという風潮が、一般的にありません。だいたい村の文化がありますから。昔平和な村ですごく頭のいいやつが出てくると、石で頭を割ってたたき殺せなんていう民話が相当残っております。つまりそういうやつは、社会（ムラ）の秩序・平和というものを乱すから、そんなのは早く、早いうちに摘め、というような民話が案外日本にあるんですね。

私はそういう才能を育てるというのが日本では弱いと思うんです。そういう国でありながら、日本はどんどん若年人口が減少してきて、我が国が活力ある国として生き残っていくためには、減少した若者達の卓越した才能を大切に育てていくということが要請されるということは、否定できないと思うんですね。だから優れた才能を見出して育成するという才能教育の役割というものは、どんなに重視しても重視しすぎることではないんじゃないかと、

私は考えております。

こういうことを考えますと、やはりいくつかの手段が必要で、大学というものがもう少し才能教育というものを考える必要があると思います。大学は受験の中から受験英才、受験才能者をとることに非常に惹起になっている。結果的に惹起になっているようなところがある。これはうちの研究室の調査で、大学院の学生が調べたんですけど、今一貫性、国立私立の一貫性受験高校というのが非常にブームになっておりまして、幼稚園ぐらいからそこに入れるというのが流行りました。文部省の高官の子供さんなんかも、ずいぶんそういうところに行っているんじゃないかと思うんですけど。つまりそういうのが増えまして。国立大学私立学校の一貫性受験生高校のシェアが、東大が1974年には33.9%、84年には45.1%、94年には実に52.1%。京大も後を追っかけてまして1974年には17.8%、ただし84年には23.8%、94年には東大に追いつきまして44.7%、5割。5割をこの一貫性の私学国立の中からとっている。これはやっぱり異常である。14期中教審では西尾幹二さんが暴れまくって、このへんのところを突いたんですけど、だいたいシェアというのは、2、3%の高校から有力大学というのは半分以上の学生をとっている。これはしょうがないんですね。寡占状態なんです。ただ5割以上をこういうところをとるというのは、私は少し不安なんですって、一つの教育病理じゃないのかなあと考えています。私はこのへんは京都大学や東大が勝手にやればいいんで、中教審が何か言うからやるというんじゃなくて、大学が自分でコントロールすれば良いと思うんですけど。阪大なんていうのはまだ23%。九大は8.7。東北大が3.1。北大が2.7ですから。こういう大学というのはまだまだ、何て言いますか、地方のフレッシュな県立高校の人々をとっている比率が高いと思うんですね。

こういうことを考えてみますと、受験才能教育というものが日本で過剰に行われている。だから、才能教育を取りあげるのに一番人々が、いやに感じるのは、それから世論の支持とか文部省も腰が座らないというのは、今日、世論も教育界も受験戦争のための受験才能教育の加熱現象に振り回されておまして、新しい才能教育というのはこれに拍車をかけるんじゃないかということをおそれているんだと思うんですね。それから我が国の教育風土は卓越した、異能の才を大切に育てていくという風習が伝統的に弱いこともこれに拍車をかけています。野茂なんかが出てくると思うんですけども。野茂は少し暗いですね。もう少し明るい人が出てくれるといいと思うんですけどね。ああいう才能がどんどん出てくればいいかと思うんですけどなかなかそうはいきません。つまり、我が国の新しい才能教育というものを我が国の社会に定着させていくということが、どうしても必要になってきているんじゃないかと思います。ここでもたまたましてはだめではないかというのが私の関心でして、それに対して、せっかく大学教育・教授法の改革というものを研究するセンターができたんですから、なにも京都大学のことだけを考えるのではなくて、京都大学の中で一体こういう才能教育 advanced placement、つまり高校生に大学の授業科目を持たせるということはどういうふうにしてやったらいいとか、一体数学とか物理で acceleration というものをどうやっていったらいいか、研究していただきたいと思います。たとえば、18才年齢人口の壁なんていうのはある程度もう捨ててもいいんじゃないか、という問題があると思うんです。それに関しては、下の高校中学の3・3という制度がございまして、3年の教育期間というのは例外措置を導入するにしろ非常に柔軟性を欠くんです。ですから私は3・3である限り非常に難しいと思うんです。3年3年をつなげて才能教育をやるというのも可能かもしれませんが、大学がもう少し才能教育というものに initiative を取って欲しいというのが、今日のお話のポイントでございました。じゃないと、日本というのはもういっぺん才能教育というものがしぼんでしまうだろう。今度の中教審でどれまで出すかというのが問題なんですけれども、やはり日本でも才能教育というものを大きく開花させていく必要があるんじゃないか。昔の先生というのは才能教育を非常に大事にしておりました。例えば太宰治なんていうのは、青森の中学校の先生が彼の文学の才を認め伸ばさなかったならば、自分の才能もわからないままに終わったと思うんですね。林芙美子は奔放な女性でしたから、尾道の女学校の先生がいなかったならば、おそらく奔放な世界で溺れて死んでいたのではないかと思います。つまり、あれだけの才能を自分で確立できなかったんじゃないか。つまり、本当の意味で才能教育というものがわからない教師は、落ちこぼれの生徒に対してもはっきりした目配りができないんじゃないかというふうに私は考えております。

もう一つのエリート教育の方はどうするかの問題なんですけれども、エリート教育はずっとほっておかれたままでいいか、ほっておいたままでいいかという問題でございます。才能教育の方はだんだん advanced placement とか skipping ができるようになると思います。それからやっぱり18才年齢人口が減ってきますと、17才でも入れていい

んじゃないかという動きが出てきますし、私学の中でも付属を持っているところでは、もう少し柔軟に17才からいい人にとって、そういうクラスを作って、どんどんやっていったらいいと思うんです。そうしますと、18才年齢人口のマーケットが2倍になりますから、その中からいい人もとれるということになると思うんですけれども。ではエリート教育の方はどうか。エリート教育というのは非常に難しいということと言ったんですけれども、今はエリート教育というのは、受験エリートの教育になっていて、東大と京大というものが5割以上中・高一貫性の受験エリート校からそういうところから学生を入れている。こういう人々はどういう人々かということ、非常に優秀なんですけれども、必ずしもクリエイティブかどうかはわからない。岡田先生の誠意がわからないわけですね。国立大学共通テストのトップから100人の人を14、5年どこに行っているか調べた結果を見ると、トップ100ということはケアレシスのない成績の持ち主です。それがどこに行っているかと調べてみますと、ほとんどが東大と京大の法学部と医学部に行っているんです。理工系の学部に行っていないんですね。つまりそれだけ。言ってみればアメリカのユダヤ人と同じような進学先を選んでるわけです。そういうようなことをやっていいかどうか。本当のエリート教育は一体どこでやるのか。人に言わせますと、6・3・3の3・3をつないでやればよいという考えもあるんですけれども、エリート教育のポイントというのは結果的には日本の有力の大学の中でやっているとも言えます。マルティン・トロウという人は、どの国でも大学の学生の1割のところで何らかの形でエリート教育をやっているから、国というのはもっているんだ、という話をしているんです。

やはりエリート教育の特徴は、一つは selective であるという選別的な性格を持つことだと思うんですね。二つ目は、小集団的な教育方法を積極的に利用すること。それから三つ目は、やっぱり社会における使命感というものを自覚させることですね。四つは、さっき言ったような知的能力じゃなくて高い倫理能力というものを養成する。最後は知・徳・体のバランスのとれた全人的な人間教育であるというふうに思います。才能教育はタブーを破れたけれど、目的意識的なエリート教育というものはまだはっきりとは表面には出てきていない。エリート教育やっているんですよという目的意識的な学校はそれほど出ていない。昔日本が作ったエリート教育のシステムというものは崩壊している。そして今、井村総長は旧制高校ですね。だけど東大の吉川さんは新制ですね。だから次の総長は全て新制ですね。それから官僚は全部新制。経営者もほとんど新制になりましたね。財界人はわりと年寄りが多いもんですから、まだ旧制高校なんですけど。つまり、そういうふうに変わってきている。その中で目的意識的なエリート教育のシステムを作らなくて日本は大丈夫か、そういう問題ぐらいは考えていただきたいというふうに思っております。

ちょっと非常に早い話になったんですけれども、岡田先生にお願いしたいのは、やっぱり日本版 advanced placement とか acceleration とか、つまり高校と大学の新しい articulation というものの中での教授方法のご研究をお願いしたい、というふうに考えております。どうもありがとうございました。